

第十七回和辻哲郎文化賞 一般部門 受賞作

平川 祐弘 著『ラフカディオ・ハーン

—植民地化・キリスト教化・文明開化—』

(2004年3月20日 ミネルヴァ書房 刊)

平川 祐弘 ひらかわ すけひろ 昭和6年(1931)生まれ。東京都出身。専攻は比較文化関係論。東京大学教養学部教養学科卒業。フランス政府イタリア政府給費留学生。東京大学大学院比較文学比較文化博士課程修了、文学博士。東京大学名誉教授。著作は、『ルネサンスの詩』、『和魂洋才の系譜』、『マッテオ・リッチ伝』全三巻、『小泉八雲—西洋脱出の夢』(サントリー学芸賞)、『米国大統領への手紙』、『アーサー・ウェイリー『源氏物語』の翻訳者』、訳書に、ダンテ『神曲』(河出賞)、マンゾーニ『いいなづけ』(読売文学賞、ピコ・デラ・ミランドラ賞)、他がある。

受賞のことば

ラフカディオ・ハーンは明治二十三年八月二十六日ごろ、当時は東京から延びる鉄道の西の終点だった姫路から、人力車で北上し中国山脈を越え伯耆へ出た。昨二〇〇四年はハーン没後百年に当るので、縁の深い東大・早稲田・西宮・松江・熊本などで連続国際シンポジウムを開いたが、盛会で日本における人気のほどが感じられた。西洋からの参加者も喜んだのは姫路からハーンの足跡をバスでたどったことで、中山町の盆踊りでは、ハーンが『知られぬ日本の面影』に書きとめた「野にも山にも子は生みおけよ」の歌詞もうたわれた。柳田国男が陸中小子内の盆踊りを叙したのはそんなハーンに刺戟されてのことではあるまいか。今回このゆかりの地で、私のハーン研究に対し和辻賞を授けられ嬉しく思う。従来の英米文学者とはおおよそ違う比較文化史的なアプローチが認められたことを感謝している。ちなみに日本に帰化し小泉八雲となったハーンは数少ない神道文化の理解者でもある。

《選考委員評》

新しい時代を知るために

陳 舜臣

昨年は小泉八雲ラフカディオ・ハーンの死去百周年であった。彼が生きたのは、白人至上、植民地化、キリスト教化が、疑いをもたれず善とされた時代である。そして日本も日清戦争の勝利者として、植民地帝国の仲間となる希望に燃えていた。

ハーンはそんな時代の風潮に逆行する文学者であった。そう思われていた。しかしじつは逆行というよりは、時代に先行、それも先行しすぎた文学者であった。

ハーンの死後百年たって、植民地主義がようやく時代おくれとなり、ポスト・コロニアリズムが論じられるようになった。どうやらハーンは軸足を変えずに、そのまま時代の先頭に立ったようである。

ながいあいだハーンは変り者、それもマイナーな人物とされてきた。それがなぜ急に、あまり使いたくない表現だが、脚光を浴びるようになったのか、なまじ彼が小泉八雲として日本では誰でも知っている人物だけに説明してほしいと思う。

平川・弘氏の「ラフカディオ・ハーン」は、このわれわれの要求にみごとに答えてくれている。また私は平川氏の作品に、著者と読者のあいだに、信頼関係をもとめる姿勢をかんじた。これほど著者の肉声を、心のなかできく思いがした作品を、近ごろ読んだことはない。

個人的にいえば、ハーンの『草ひばり』と漱石の『文鳥』の共通点と異質点を論じた章に最も興味をもった。まさに著者の肉声による講義、というより実習の授業に参加している思いがした。

和辻哲郎文化賞に、それにふさわしい受賞作をえたことをよろこびたい。小泉八雲ラフカディオ・ハーンといえ、かつて受験用に Kwaidan を読み、その後ながくご無沙汰している人が、私を含めてかなり多いと思う。そんな人たちに、「新しい時代」を知るために、百年

前にこの世を去ったハーンのことを、平川氏のこの作品で理解してほしいと思う。

梅原 猛

今回の和辻哲郎文化賞一般部門の候補作に選ばれた作品のなかにはレベルの高い作品が三点ほどあったが、私は平川・弘氏の『ラフカディオ・ハーン 植民地化・キリスト教化・文明開化』がもっとも受賞作にふさわしいと考えていた。そして多少の議論の結果、この作品が受賞作に決まったが、これは和辻哲郎文化賞にとっても喜ばしいことである。

なぜなら、和辻哲郎文化賞には、和辻哲郎の輝かしい業績から考えても、後世の日本文化に影響を残す作品が選ばれるべきであり、平川氏の長年にわたるラフカディオ・ハーン研究は、日本文化研究の歴史に一つの大きな波紋を投げかけるものであるとあってよいからである。

受賞作は長年の平川氏のハーン研究の集大成をなすものであろうが、ここで平川氏はラバ神父の『マルティニーク紀行』をとり上げ、ラバ神父のキリスト教文明本位の見方がハーンの見方と百八十度違うことを明らかにする。こうしてキリスト教国に生まれながら、キリスト教文明本位の偏った世界観を超えた新しい世界観を提供したハーンの父母の人生と思想を明らかにし、ハーンがなぜ日本の幽霊談に興味をもったのかという謎を解く。そしてこのような幽霊談の背後にハーンは日本人自身すらかつて知らない深い魂をみたという西田幾多郎のハーンに対する批評を、平川氏は高く評価する。

日本の文化のみならず世界の文明に対して新しい視野を開いたハーンの意味を明らかにしたことにおいて、平川氏の業績は大いに評価すべきであるが、私には多少の注文がある。それは、ここで平川氏のいう神道が明治以後の国家神道とどう違うのか、またハーン自らは、彼の思想はスペンサーの影響を受けたものとするが、このような思想はデカルトに始まる近代的思想とどう違うのかという問題についてである。これらの点の追究を今後の平川氏に期待するものである。

山折 哲雄

着物をきて畳の上に坐り、横顔をみせているその人物の写真の姿を、よく覚えている。首から上が文学者ラフカディオ・ハーン、胴から下が日本の民俗社会で生きた小泉八雲。その首と胴をつなぐ回路に、いったいどんな血が流れ、肉が躍っていたのか。一身にして東と西の文明を媒介した稀有の男の生き方とは、究極的に何であったのか。

この興味ある問題について思索を重ね、調査研究の旅をくり返し、その成果を国内はもとより国際社会の学界において発表しつづけてきた著者の仕事のエッセンスが、こんどの受賞対象になった作品である。おそらくこの人をおいて外の誰にもなしえなかったであろう独自の内容が、そこに多彩に盛られることになった。

平川さんの文章を読みながら、私はいつのまにか日本史上にハーンに類似の人間を探し求めていたが、やがてそんな人間は皆無にひとしいことに気がついた。フランシスコ・ザビエルの名が浮んだが、あれは正真のキリスト教徒であった。ケルトやギリシャの異教風の土壌から出立して、この日本列島の神道世界に深く潜入することのできたハーンとは比ぶべくもない。十六世紀のキリシタンは辺境オリエントの魂を獲得するためにやってきたが、明治文明開化期のハーンはその民俗社会に息づく霊的世界と交感し、その経験を美しい言葉で紡ぎ出すためにやってきた。

もう一つの印象的な物語がある。ハーンが自己自身になるためにくぐらなければならなかったアメリカ時代の体験である。奴隷、移民、混血の伝承が生きている陋巷に身を浸し、そこからクレオール（混血語）民話の発掘につとめた半白人のハーンの生き方を浮き彫りにしていく。ハーンにおける母恋いのテーマが、読んでいてとくに胸に響く。彼と漱石の小説を比較しているところも目を惹くが、著者の自在な筆致はすでに専門の領域をふみこえていて、読む者の心を刺激してやまないのである。